

〈惑星〉を意味する語の変遷

吉野 政治

同志社女子大学・表象文化学部・日本語日本文学科・教授

はじめに

天動説による宇宙像の一つに九重の天から成るものがある。最も外側には何も存在せず、動くことのない常静天があり、その内側には無数の星が貼り付いている総動天がある。さらにその内側には鎮星(土星)・歳星(木星)・熒惑(火星)・日輪・太白(金星)・辰星(水星)・月の七つの星が巡る七つの天がある(注①)。

こうした宇宙像によって天体は二種に分類される(注②)。第一種は、総動天に貼り付く無数の星である。これらは互いの位置関係を変えることなく東から西へ動く。すなわち今日言うところの恒星である。第二種は、総動天の動きに随って東から西へと動きながら、それぞれの所属する天の動きによって西から東へと動くものである。この第二種の星は二つのグループに分けられる。ひとつは鎮星天・歳星天・熒惑天・辰星天、太白天・辰星天のそれぞれ存在する星であり、現在いうところの惑星である。もうひとつは、特に明るく輝いて我々の生活に直接に関わる存在である星、すなわち月と太陽である。

本稿では第二種のひとつめのグループの星を総括していう語が天動説から地動説へと、パラダイムの変換によってどのように変化したかを見る。以後、惑星をメタ言語として用いるときには〈惑星〉と表記し、実際の語を指すときには「惑星」と表記する。

本論に入る前に第一種の星、すなわち総動天に貼り付く無数の星の総称である「恒星」「経星」について簡単に触れておきたい。この二つの名称は本稿で見ようとする星々、すなわち〈惑星〉の総称と深く関わるからである。

「恒星」の語は早く『春秋』莊公七年夏四月条に「夜、恒星不レ見」と見える。左氏伝の「注」に「恒、常也。謂二常見之星」とある。公羊伝の本文には「夜、

恒星不レ見。(中略) 恒星者何。列星也」とあり、その注に「恒、常也。常以レ時列見」とある。すなわち「恒」は「常」の意味であるが、その「常」というのは常時見えることを言うとも、互いの位置関係が不動であることを言うとも理解される。左氏伝の「疏」には「公羊伝曰、恒星者何。列星也。言、天官列宿常見之星也」と、その両方の意味に理解できる説明がある。

日本では互いの位置関係が不動である星という意味に「恒星」を用いているようである。地動説を最初に我が国に紹介した本木良永の『星術本原太陽窮理了解新制天地二球用法記』(寛政四年[1792]成。以下、本文の引用は『日本哲学全書』第八卷所収、昭和十一年五月・第一書房刊による)に、

恒星ヲ名ヅケテ、発数鐸・数鬪耳楞トイフ。此ノ語發数鐸トイフハ居テ不動ノ語意、数鬪耳楞トイフハ星ト通ズ、恰モ不動星ト言ハンガ如シ。此ノ發数鐸・数鬪耳楞トイフ語、此ニ恒星ト義訳ス。(下巻)

とあり、*vaste sterren* の訳語に「恒星」が用いられており(*vaste sterren* はオランダ語。*vast (vaste)* は「固定した」「不変の」の意。*star (sterren)* は星の意)、司馬江漢『地理理譚』(文化十三年[1816]成)に「二十八宿及ビ衆星ハ之ヲ列星ト呼ンデ、其ノ象ヲ不レ変。故ニ之ヲ恒星ト云」(「恒星ノ窮理」)とあり、吉雄南臯『遠西観象図説』(文政四年[1821]刊)もまた、

恒星ハ：靜居シテ其位置ヲ改メズ。故ニコレヲ恒星ト云ヒ…(巻下「恒星」)と同様の意味で用いている。英語の *fixed star* もまた、動かないことに着目した名であるが、ヘボンの『和英語林集成』(三版・1886)には「恒星」と訳されている(初版、二版には見られない)。ちなみに中国ではミューアヘッドの『地理全志』(1853)には「定星」とあり、『六合叢談』(1857)には「恒星」と「定星」の両方が用いられており、ロプシヤイトの『英華字典』1866-9)では「定星」と訳されている。現在では「恒星」に落ち着いているそうである。

「経星」の「経」もまた「常」の意味であるが、この場合の「常」は互いの位置

関係が一定であることを言うもののようにある。穀梁伝『春秋』莊公七年夏四月辛卯条に「恒星不_レ見。恒星者_レ經星也」とあり、その「注」に「經、常也。謂_二常列_レ宿」とある。また、『漢書』天文志に「凡、天文在_二圖籍_一昭昭可_レ知者。經星常宿中外官凡百一十八名。積數七百三十八星。皆有_二州国官宮物類之象_一」とあり、『晉書』天文志の「天文經星」という項目も列宿を成す星について説明したものであり、さらに清の遊芸の『天経或問』（一六七五年序）にも、

恒星亦名_二列宿_一。亦名_二經星_一。云_レ恒者、謂_二其終古不易_一也。

（天卷「恒星多寡」）

とある。この『天経或問』は江戸時代の日本でも多く読まれた書物であり、したがって「經星」の語もまた日本で同様の意味で用いられている。大庭雪斎『民間格知問答』（文久二年[1852]刊）には「經星」とあり、訓読もされていたようである。大森秀三『博物新編訳解』（慶応四年[1858]序）には「定位經星」という振り仮名も見える。「經」がこの意味を持つのは、布を織る時に緯（横糸）が左右から差し込まれるのに対して、經（縦糸）は固定されていることによるものと思われる。

1 〈惑星〉の名称① 「五星」・「五行」・「五歩」

さて、十八世紀末に天王星が発見されるまで、〈惑星〉は辰星、太白、熒惑、歳星、鎮星の五つの星だけであり、「五星」と呼ばれていたが、これには五行思想が関わっているようである。「日月五星は畢竟陰陽五行の精の天上に凝り積つて居るもの」(注③)と考えられたからである。

太史公曰。(中略)仰則觀_二象於天_一。俯則法_二類於地_一。天則有_二日月_一。地則有_二陰陽_一。天有_二五星_一。地有_二五行_一。天則有_二列宿_一。地則有_二州域_一。三光者陰陽之精。氣本在_レ地。而聖人統_二理之_一。 (『史記』天官書)

五星合_二於五行_一。水合_二於辰星_一、火合_二於熒惑_一、金合_二於太白_一、木合_二於歳星_一、土合_二於鎮星_一。 (『漢書』律歷志)

張衡云、文曜麗_二乎天_一、其動者七、日月五星是也。日者、陽精之宗。月者、陰精之宗。五星者、五行之精。 (『晉書』天文志上・天文經星)

したがってまた「五星」は「五行」とも呼ばれたようである。

天有_二五行_一。一曰木。二曰火。三曰土。四曰金。五曰水。

(董仲舒「春秋繁露」)

さらに五行の「行」の伝来の字音は、行跡の意の去声 hang、また行列の意の hang ではなく、歩行、流行、運行の意味の戸庚切 (hsing の下平声) であるとさ

れるが(注④)、『説文解字』「歳」の項に「律歴書名_二五星_一為_二五歩_一」とあり、「五星」は「五歩」とも呼ばれたようである。おそらくこれは次のような理由によるものと思われる。『漢書』律歴志には「五歩。木晨始見、去_レ日半次、順_レ日行十一分度二百二十一日、始留(下略)」「木(木星)晨_二始_一始めて見て、日而去ること半次、日に順ふこと十一分度の二百二十一日にして始めて留る」とあつて、金土火水の星について同様の記事がある。したがって、「五歩」は五星の運行を測ることを言ったものであり、やがて五星そのものを言うようになったのであろう。

以上の五行説と関わりの深い名称の中で日本で広く用いられたのは「五星」だけのものである。西洋天文学を紹介した本木良永や志筑忠雄や吉雄俊蔵(南阜)の文章にも五つの惑星を纏めて言う場合にこの語が用いられている。この慣用は明治に入つてもあり、例えば次のように用いられている。

西洋の古説支那方今の説を渾天の説といふ。其説に曰く、地は周回五千四百里(中略)にして円球の如く天の中央を懸り、日月五星、これを旋回し、恒星其外を羅列す。 (黒田行元「新曆明解」明治六年[1893]刊)

2 〈惑星〉の名称② 「五緯」・「緯星」

〈惑星〉は恒星とは異なり、地上から観察する時に見られるその運行に特徴がある。既に「五歩」の名もその特徴から名づけられたものと考えられることを述べたが、『後漢書』律曆下・曆法に「日月五緯」などと見える「五緯」の名もこの特徴から付けられたものようである。『周礼』春官・大司馬に「以_二三禮祀_一天上帝_一、以_二三実芝_一祀_二日月星辰_一云々」とある鄭注に「星、謂_二五緯_一」とあり、賈公彦の疏に

五緯、即五星。言_レ緯者、二十八宿随_レ天左転為_レ經、五星右旋為_レ緯。

とある(右旋「原文」左旋)。嘉慶二十年重刊宋本十三經注疏の校勘記に「蒲鍾云右誤左」とあるのによつて改める。すなわち、二十八宿(經星)は東から西に動き(左転)、五星は西から東に動く(右旋)。その二十八宿の動きを經と言ひ、五星の動きを緯と言ふことにより、「五緯」の名があるのである。

また、時代が降ると五星は「緯星」と呼ばれる。『天経或問』に

三垣二十八宿与_レ天並運。而一定不_レ移者、為_二經星_一也。日月五星、運_二行於列宿_一。而無_二定在_一者、為_二緯星_一也。 (天卷「經星各位」)

とある。この場合の「緯」は、「經星」の「經」が一定して動かないという意味であるのに対して、定住することなく動くという意味である。前述のように機織りの

縦糸（経）は固定されているのに対し、横糸（緯）は左右に差し込まれることから来たものと思われる。ただし、その動きは南北の方向を意味する。

恒星亦名二列宿一、亦名二経星一。云レ恒者、謂二其終古不易一也。云レ経者、以別三五緯南北行一也。
（天卷「恒星多寡」）

すなわち五星の行う東から西への動き（左旋）と西から東への動き（右旋）に加えて、南北へも若干動く。この南北への動きを明らかにしたのは西洋天文学であった。同じく『天経或問』に

原不レ語レ有二緯行一（此緯行、近歳西儒熊羅諸公始測出）。一見三金星在二緯南北七八度之間一、即 詵 謂二之失行一。皆不レ知下五星有二緯行一之故也。然五星有二緯南緯北之分一。
（天卷「五星遲疾伏退」）

とある。西儒熊羅とはイタリア人宣教師熊有綱と羅雅谷を指す。したがって、「五緯」と「緯星」とは同じく「緯」が用いられているが区別されるべきものである。

前述のように『天経或問』は西川正休による訓点本（享保十五年〔1730刊〕）によって日本でも広く読まれたが、正休自身も『大略天学名目抄』（享保十五年〔1730刊〕）で次のように「緯星」の語を使用している。

経緯二二ツアリ。南北ヲ緯トシ、東西ヲ経トスルハ七曜ハ黄道ノ緯行ヲナス故ニ緯星トス。二十八宿并二恒星ハ、東西ニ経行運旋スル故ニ、経星恒星ト云リ。是ハ東西ニ旋ル恒星ヲ経トシ、南北ニ旋ル日月五星ヲ緯トスル也。又天地ノ南北ヲ経トシ。東西ヲ緯トスル有リ。是ハ南北ノ不動ヲ縦糸トシ、東西ノ昼夜左旋スルヲ緯糸ニ譬フ。
（『実経緯視経緯』）

七曜ハ自行有テ、行度伏見、時々動ヲ斎シカラズ。是ヲ緯星ト云。
（『二十八宿又二十八舎』）

志筑忠雄の『曆象新書』（寛政十年〔180成〕）にも「緯星」の語が見られる。しかし、日本では「五緯」と「緯星」とは特に区別されずに用いられたこともあったようである。馬場信武の『初学天文指南』（宝永三年〔1806刊〕）の次の文章は『天経或問』の文章がほぼそのまま利用されたものであるが、「五緯」の語が用いられている。

恒星ヲ亦列宿ト名ヅケ、亦経星ト名ヅク。恒ト云ハ其終古易ザルヲ謂ナリ。経ト云ハ五緯南北二行ト別ナル故ナリ。
（卷二「恒星多寡ノ論」）

3 〈惑星〉の名称③ 「惑星」と「遊星」

前述のように「緯星」の語は西洋天文学から得られた知識を在来の用語を利用し

て造られた語と言え、日本では西洋天文学書の〈惑星〉を意味する語をそのまま直訳した「惑星」があることは周知のところである。

英語の Planet はラテン語の planet(a)「ギリシャ語の Planetes（xまようもの）から来ている」という。オランダ語の dwaalster の dwaal(en)も同様の意味である（『訳鍵』「Dwaalen 迷。惑」、『和蘭字彙』「Dwaalen 迷フ」）。dwaalster を「惑星」と訳したのは本木良永であったこともまた知られている。『星術本原太陽窮理了解新制天地二球用法記』上巻に次のようにある。

和蘭語、和桴掇甫刺控夜天と名づくる六星あり。和桴掇といふを此に頭と正訳す。甫刺控夜天といふは刺的印天学語なり。此の語和蘭に読瓦而数得耳と通ず。此に惑星と訳す。又一名は読瓦而选耳といふ。此に惑者と訳す。和桴掇甫刺控夜天といふときは頭惑星と正訳すべき語なりと雖も、和蘭の語意は人の頭といふときは、長たる人の位高大なるをいひ、大いなる義に取るが故に、今此に大惑星と義訳す。此の大惑星六星といふは、辰星・太白星・熒惑星・歳星・鎮星の五曜に地球を加へて六星と為して、其の総名を大惑星といふなり。和蘭人、惑星惑者と名づくる義は、五星地球は、今爰に在るかと思れば彼所に在りて、天学者推歩測量を為すに纏度に迷へるに因りて、水・金・火・木・土の五星に地球を加へて六星と為して、大惑星と名づけしなり。

同書下巻にも同様の説明があり、訳語「惑星」についての部分は次のようにある。惑星惑者と名づくる趣旨は推歩測量の学士七曜の纏度を測り視るに、今此所に在るかと思れば彼所に在りて、一瞬間の間も一所に在らず、暫くも動かざる事なく、測量者纏度に惑ひ、一世一代を歴るとも不断七曜の纏度に惑へる故を以て、日月五星の七曜を名づけて、総名を惑星惑者といふなり。（破線部分については後に取り上げる）

すなわち「惑星」はオランダ語 dwaalster に対する訳語であり、五星に地球を含めた名である。良永は現在言うところの衛星をも原語を直訳して「小惑星」また「副惑星」と訳している。

民迭列甫刺控夜天といひ、又は別逸甫刺控夜天と名づくる十星あり。民迭列とは微小なるをいふ語なり。別逸とは副といふ語なり。民迭列甫刺控夜天といふを、此に小惑星と訳す。別逸甫刺控夜天といふを、此に副惑星と訳す。
（上巻）

「惑星」と同じく dwaalster を訳したものに「遊星」（游星）がある。吉雄俊蔵（南阜）の『西説観象経』（文政五年〔1822〕）に、

又有二恒河沙数小光点。名曰二恒星一。皆為二東移一。有三五箇光点。時伏時

見。時進時退。其一水星。其一金星。其一火星。其一木星。其一土星。総名二之游星^一。

と見えるのがその初出例であり、同『遠西観象図説』(文政六年1823序)には、

游星 ドワール、シルケル (卷上・国字類音 観象名目)

其大小数箇ノ大土塊、半面ハ太陽ニ対シ、明瞭亮ニシテ、半面ハ太陽ニ背キ、幽暗ナリ。遠ク其大土塊ヲ望ムトキハ、一点ノ恒星ノ如シ。然レドモ、太陽ヲ旋回スルガ故ニ、常ニ游行シテ止マズ。故ニコレヲ游星ト云フ。

(卷中・太虚)

という説明がある。吉雄は「五星」に地球を加えたものを「大游星」、衛星を「小游星」とし、地球の内側を廻るものを「内游星」、外側を廻るものを「外游星」と名づけている(注⑤)。

以降、僅かな例を除いて、日本では〈惑星〉をいう語にはこの日本製の「惑星」「遊星」の語を専ら用いるようになった。明治維新以前の「惑星」「遊星」の用例に管見では次のものがある。

- 文化五年1808 司馬江漢『刻白爾天文図解』 [惑星]^{ワッサイ}
- 文化七年1810 藤林淳道『訳鍵』 [惑星]
- 文化十一年1814 『厚生新編』(卷七) [惑星]^{わくせい}
- 天保六年1835 宇田川榕菴『蘭学重宝記』 [惑星]
- 嘉永四年1851 川本幸民『気海観瀾広義』 [游星] [惑星]
- 嘉永七年1854 村上義俊『三語便覧』 [惑星]^{まゆらせい}
- 文久二年1862 大庭雪斎『民間格知問答』 [遊星]^{まゆらせい}
- 慶応二年1867 宇田川榕精『地学初歩和解』 [遊星]^{ワッサイ}

4 〈惑星〉の名称④ 「行星」

明治時代に入ってから「惑星」「遊星」の両語が用いられているが、維新前後から暫くの間「行星」の語が現れるのが注目される。

- 慶応三年1867 ヘボン『和英語林集成(初版)』 [行星]^{アウグホウシ}
- 慶応四年1868 大森秀三『博物新編訳解』 [行星]
- 明治三年1870頃 西周『百学連環覚書』 [行星]
- 明治七年1874 中村正直『西学一班統訳』 [行星]
- 明治九年1876 西村繁樹『天文学』 [行星]
- 明治十年1877 小宮山弘道『格物全書』 [行星]

明治十九年1886 中江兆民『理学鉤玄』 [行星]

「行星」という語の成立時期また造語者は未詳であるが(注⑥)、中江兆民『理学鉤玄』に「太陽ノ周辺ヲ廻転ス。行星ノ名有ル所以ナリ」とあり、この説明が正しければ、この名称はコペルニクスの地動説あるいはブラーへの天動地動折衷説以降に造られたものであることになる。荒川清秀氏(注⑦)によると、中国の辞書ではメドハースト『英華辞典』(1847-8)に初出すると言う。「定星」に対する語として中国で造られたものであろうか。前田富祺監修『日本語語原大辞典』(小学館1999.11)は、明治以降に日本で「行星」が用いられたのは、ロプシャイトの『英華字典』(1866-9)の影響があったのであろうとされる。あるいは『六合叢談』(1857-8)で連載された「西国天学源流」の文章にも「行星」が多用されており、ホブソン(合信)の『博物新編』(1864)第二編は「行星論」である。これらの西洋天文学を紹介した文章からの影響の方がむしろ大きかったものと思われる(注⑧)。また『日本語語原大辞典』では「行星」が使われなくなったのは、「恒星」と同音のためであろうと推測されているが、明治十九年(1886)のヘボン『和英語林集成』(三版)では、

- YUSEI ユウセイ 遊星 n. planet. Syn. GYOSEI
- GYO-SEI ギヤウセイ 行星 n. A planet
- KOSEI カウセイ 行星 A moving star. a planet gyosei
- KOSEI カウセイ 恒星 n. Fixed star - i. q. gosei. teisei
- GOSEI ガウセイ 恒星 n. Fixed star

とあり、「恒星」にはガウセイの語形もあり、「行星」はギョウセイの語形もあったようである。「恒星」をガウセイと訓む例は2節で引用した『新暦明解』の振り仮名付きの例でも確認できるが、さらに遡って宝暦四年1784刊の文雄『非天経惑問』にも「恒星」と見える。ちなみに、右の『和英語林集成』に「KOSEI カウセイ 恒星」の項に teisei と見え、「定星」の名も日本に入っていたようである。

明治期の「惑星」と「遊星」の使用状況は、横田順弥氏(注⑨)に詳細な調査があるが、江戸時代と同様に一定していない(注⑩)。一般に及ばず影響が大きい教科書類で見ると、小学校の物理の教科書として広く利用された片山淳吉『物理階梯』(明治五年1872)には、

諸游星ノ太陽ヲ中心ト為シテ運行スル、各其常道アリト雖モ、之ヲ望ムトキハ或ハ西シ或ハ東スルモノノ如ク、常ニ其所ヲ異ニシ、行道ノ惑乱スルヲ覚ルコト、恒星ノ其地位ヲ同ウスルガ如キニ非ズ。因テ又惑星ノ名アリ。

とあって、「遊星」の別名として「惑星」があり、師範学校で使われた宇田川準一

『物理全志』（明治十二年）には、

惑星（遊星或は行星とも云ふ）

とあって、「惑星」の別名として「遊星」「行星」があるといった状態である。これによると一つの名称に定めようとする動きは窺えないが、横田氏によると、東京帝国大学系の学者は「惑星」を使用し、京都帝国大学系の学者は「遊星」を使用する傾向があったようである。また、同氏によると、昭和三十年前後までは圧倒的に「遊星」が多いが、以降は「惑星」が多くなり、「よほど特殊な例を除いて「遊星」が消えるのは昭和四十年ころ」と言う。ちなみに荒川清秀氏によると、メドハースト『英華辞典』以降、中国の辞書には一時的に「惑星」「遊星」が見られるが（顔惠慶『英華大辞典』1908、ヘメリング『官話』1916、『総合英漢大辞典』1927）、現在では「行星」に落ち着いているそうである。

5 新しい〈惑星〉の定義の訳語について

木星・火星・土星・金星・水星という「五星」の名は五行説によるものである。

例えば本木良永の『新制天地二球用法記』（下巻「和解例言」）に、

日月五星の名目は、和蘭人陰陽を弁せざれども和漢の名義に随ひ、日月を太陽太陰と訳し、五星の名目は固より和蘭人、木火土金水、の五行を弁せずと雖も便利なるを以て、辰星を水星と訳し、太白星を金星と訳し、熒惑星を火星と訳し、歳星を木星と訳し、鎮星を土星と訳するなり。

とある。また、この「五星」は中国の律曆志では陰陽五行説の順序に従って、木星・火星・土星・金星・水星の順序で掲げられるのを原則とする。長く五行説を受け入れてきた日本でも同様であり、「南蛮紅毛の天文学が、支那人の書を通じてわが国に移入せられる直前の天文書といふべき」（三枝博音氏）『天文図解』（井口常範著元禄二年[1689]刊）でもその順序が守られている。この五つの星が現在では水星・金星（・地球）・火星・木星・土星の順序で取り上げられるのは太陽中心説に拠ることは言うまでもない。この順序の違いは万物を構成する五行の精の凝り積つたものと捉えられていたものが新しい〈惑星〉の概念で捉え直されたことに外ならない。その結果、地球も〈惑星〉の一つとして位置づけられることになった。また、この新しい宇宙観と望遠鏡の発明によって、新しい〈惑星〉が次々と発見された。

一七八一年には天王星が発見され、一八四六年には海王星が発見された。これらの星の発見によって、五行思想と無関係な西洋天文学を紹介する文章でも用いられていた「五星」もまた〈惑星〉を言う語としての資格を失ない、「惑星」「遊星」ある

いは「行星」がそれに代わる語として用いられるようになった。そして、現在の日本では「惑星」が専ら用いられているわけである。しかし、これに関連して次のような問題がある。

一九三〇年には他の〈惑星〉と比べて小さい冥王星が発見され、一九九二年以降に冥王星の軌道近くで冥王星と大きさの変わらない天体が続々と発見された。さらに、二〇〇三年には冥王星より大きいと推定されるエリスが発見され、このことをきっかけに〈惑星〉planetは再定義されることになる。国際天文学連合（IAU）が行った新定義は、

太陽の廻りをまわり、十分大きな質量をもつので、自己重力が固体にはたらく他の種々の力を上まわって重力平衡形状（ほとんど球状の形）を有し、その軌道の近くでは他の天体を掃き散らしてしまいそれだけが際だって目立つようになった天体。

というものであった（注①）。その結果、冥王星はその後に見えられた〈惑星〉とともに「準惑星」などと訳される dwarf planet という新しい分類に位置づけられることになった。注目したいのは、この新定義には「惑う」という要素は含まれていないことである。これは言うまでもなく太陽を中心として一定の軌道を巡る実際の動き（実動）に基づいて定義されたものだからである。とすれば、見かけの運動（視動）によって名づけられた planet（さまようもの）という名も、その訳語の「惑星」も、そのパラダイムの転換に合った語に変えることも考えられて良かったであろう。これより先に minor planet の訳に「小惑星」（注②）の語が用いられていたが、国際天文学連合によって〈惑星〉の新定義がなされる際には、これまで使用してきた本木の訳語「惑星」は「不動の星」vaste sterren に対する、動き回る天体を意味する語であって、太陽と月を含み（日月五星の七曜を名づけて、総名を惑星惑者といふなり）、衛星をも含むものであることも注目されても良かったのではないかと思うのである。

注① 『月令広義』『両儀玄覽』に載せる九重天の図による。

注② 彗星や流星や新星など不定時に現れるものは星ではなく、火気とされ、吉凶を占うものとして、瑞星・妖星・占星・運星と呼ばれた。『初学天文指南』（馬場信武著・寛永三年[1689]刊）には「流レ隕ル彗孛ハ皆火ナリ。…俗ニ是ヲ夜ハイ星ト名ヅク。コレ星ニテハナシ火気ナリ。…又更ニ常ニ見ル所ノ星ニアラザルアツテ、偶々天ニ見ルコレヲ新星客星ト云者アリ。…但シ此

種々俱二火氣ニ属ス。星ニテハナシ。」(巻五「彗孛総叙」とあり、『和漢三才図会』では、彗星は天部・天文の項ではなく、暈や虹と同じく天象類に入られている。

注③ 飯島忠夫『支那曆法起原考』(昭和五十四年十月第一書房刊、二二六七頁)。また、五星の色は五行の色を表わすものとされ(「五星像ニ五行之色」。故名為ニ金木水火土)、『天経或問』天之卷・経星名位)、「星」を付けて水星・金星・火星・木星・土星と呼ぶようになったのは『晋書』天官書からと言われる。

注④ 飯島忠夫『支那曆法起原考』(二二六七頁)。
注⑤ 新城新蔵著『こよみと天文』(弘文堂昭和三年九月刊、二四二頁)に、空の星を見るといふと、全体として星は東から西に移るのでありますが、其中に所々動く星があります、浪人星があります。之を遊んで居る星といへば遊星、之が動き方が分からないから惑つて居るといへば惑星と称へるのであります。が、それは星が惑つて居るのではなくして人間の頭が惑つて居つたのであります。

注⑥ とある。新城氏は「遊星」の語を用いている。
中国の歴史書の「律歴志」に「除レ逆定ニ行星ニ三度百六十六萬一千二百八十六分。」(『漢書』)などで見られる「行星」は星の進んだ度数である。また、小林謙貞『二儀略説』(正徳五年[1555]識語)に「天ノ周ラスシテ、日月星ノ巡環ナラバ、サシモ速ナル行星互ニ行アタリ、押アフ事有ヘキナリ」(上・第二「諸層宿ノ巡環、并其様体ノ事」とあるのは五星に限らず全ての星を言つたものである。

注⑦ 荒川清秀『近代日中学術用語の形成と伝播——地理用語を中心に——』(白帝社1997.10)、『六合叢談』における地理学用語「沈国威編著『六合叢談』(1857-58)の学際的研究』1999.11白帝社刊所載)

注⑧ 特に『博物新編』の影響は大きかつたようで、例えば横尾謙七著『世界節用無尺蔵』(明治六年出版免許)の天文学に関する説明に用いられている図は、ほぼ全て『博物新編』からのものである。ちなみに訓点本『博物新編』には「行星」にドワールステルの振り仮名があるが、大森秀三の『博物新編訳解』にはアルクホシの振り仮名がある(商務印書館刊『辞源』「行、行走、歩趨」)。

注⑨ 横田順弥「『遊星』か『惑星』か」(『日本古書通信』62-9。1997.9)、また橋本万平「遊星と惑星」(『日本古書通信』62-11。1997.11)を参照。

注⑩ 注⑨の文献に見えないもので注目すべき例に次のようなものがある。明治十五年田口卯吉『日本開化小史』「惑星」、明治十九年井上円了『真理金針』「惑星」、明治四十年石川啄木『漂泊』「遊星」、明治四十二年三宅雪嶺『宇宙』「遊星」。

注⑪ この訳は『Newton別冊』(2009.5)から引用。
注⑫ 良永の「小惑星」は衛星のことであったが、現在では主に火星と木星の軌道間にあつて、太陽をめぐる小天体を言う。

(2012.5.1)